

2015 年 9 月 10 日「健全な言葉」

＜ 聖書箇所 ＞「テトスへの手紙 2 章 7 節～10 節」

あなた自身を良いわざの模範として示し、人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を用いなさい。そうすれば、反対者も、わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり、自ら恥じいるであろう。

奴隷には、万事につけその主人に服従して、喜ばれるようになり、反抗をせず、盗みをせず、どこまでも心をこめた真実を示すようにと、勧めなさい。そうすれば、彼らは万事につけ、わたしたちの救主なる神の教を飾ることになるだろう。

＜ 説教抜粋 ＞「健全な言葉」

今日の説教の題名は、「健全な言葉」です。「健全な言葉」という題名にしましたが、これと正反対の言葉を敢えて言えば、「不健全な言葉」となるでしょう。私たちは言葉を通じて人に力や勇気を与えることができます。

しかし一方では、私たちは言葉を通じて相手を落しめたり、不健康にさせたりさえしてしまうことがあります。このように、言葉という能力をいかに活用するのが問題となります。言葉をよりよく用いるのか、それとも悪なる方向に用いるのかは、私たち自身にかかっているということです。

言葉は、口にした瞬間に消えてしまいますが、時には、相手の心の中で、生命的な価値を持つ場合もあるのです。「あなた自身を良いわざの模範として示し、人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を用いなさい。

そうすれば、反対者も、わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり、自ら恥じいるであろう。」。私たちは神様の御言を預かっています。御旨を知った立場をどのように扱って行くのかということが問題です。人に素晴らしい話を教える場合には、清廉と謹厳というものがが必要です。

同時に、「非難のない健全な言葉」を用いることが大切です。では最後のところを少し読んで行きたいと思います。「そうすれば、彼らは万事につけ、わたしたちの救主なる神の教を飾ることになるだろう。」。ここには、「救主なる神の教」、つまり、御言について言及していません。

御言そのものは、素晴らしい価値を持っています。しかし、御言は素晴らしかったとしても、その御言に更に美しい飾りをつけることもできれば、逆に、汚してしまう場合もあります。私たちの態度や言葉が素晴らしければ、その御言を聞く相手は、いっそう価値あるものとして受け止めることができるでしょう。

しかし、私たちの態度や言葉がぞんざいであれば、相手にとって、御言の価値は半減して見えてしまうのです。ですので、御言の価値をより素晴らしく感じてもらうためには、私たちが、清廉と謹厳に満ちた態度、かつ、非難のない健全な言葉を用いる必要があります。